

「寅はん、定はんが来たのんか」

「違ふ……、助太刀や」

「ナンヤ、助太刀、稽古の時には其様物は無かつたで」

「夫れが出来たんや、先程土手下で休んで居る處へ侍が来て、正眞の敵討と間違へて助太刀をすと
言ふね」

「助太刀したら如何なるね」

「松さんお前の首が飛ぶで」

「私い否やがな、何で其んな人を頼んだんや」

「別に頼めへん、勝手に來はつたんや」

「そんなら如何なる」

「お前は常日頃から心意氣が悪い、斷念で念佛を唱へ」

「否やがな」

「ヤア、御兄弟の方々、如何召されしや、それ其處に隙が御座る、血迷ひ召されしか」

「それ其處に、エ、某より一太刀參ろうか」

と刀の鯉口を二三寸抜きますと、ピカ／＼と光つたので、松さん平太張つて仕舞ふた。

「アハハハハ、フワイ……オイ寅はん何とかしてんか」

「今更如何も仕方がない」

「そんな言を言はんと、私と一緒に逃げてんか」

「何處へ逃げるのんや」

「何處や解らん、私の行く方へ逃げて」

「そんなら逃げる依つてに、歸つたら今晚一升奢るか」

松さん甚い處で附込まれた。

「そら逃げるで、能いか、一イニウの三ツ」

「ヒヨウ……喜やん早う逃げ」

「イヨウ……と」

「斯れは何だ、討方も、討たるゝ者も、共に逃げるとは、借は御兄弟の衆には、血迷ひ召されしか、
中村氏、卑怯未練な犬武士を掴へ召され、某は御兄弟の方々を御止申す」

「心得た、ヤア犬武士待て、逃げるとは卑怯で有るぞ、歸せ戻せ、待て……」

「待つてたまる物か、首が無くなるわい」

「御兄弟の方々、御待召され」